

ISSN 2434-9690

# 東アジア国際 言語研究

創刊号

東アジア国際言語学会  
2020年1月

# 目次

ごあいさつ	鈴木康之 (i)
<b>[特別寄稿]</b>	
文の材料としての単語と連語	鈴木康之 (1)
名詞と使役動詞 (V-(サ)セル) からなる連語	早津恵美子 (5)
<b>[対照研究]</b>	
構造で作る派生空間詞	高橋弥守彦 (25)
日本語の「を格」、「から格」の空間名詞と自動詞との組合せに対応する台閩語の 連語との比較	施 淑恵 (36)
「ノニ」文と中国語“关联词”訳の対照研究	孫 宇雷 (51)
「習得」に関する動詞の語彙的意味の分析——日中の結果複合動詞を中心に——	蘇 丹 (61)
「のだ」文と焦点・強調的“是”字文との対照研究 — 対訳における 意味伝達と形式選択から—	曹 銀閣 (72)
「飛び+V」と“跳/飞+V”についての一考察	陳 雄洪 (82)
拡張意味単位からみた日中同形語の対照研究—「精神」を例として—	梁 鵬飛 (92)
<b>[日本語研究]</b>	
不可能形式による禁止表現	李 楠 (103)
コーパスに基づく類義語の意味分析の研究—「はがれる、むける」などを中心に—	李 響 (111)
日本語の存在文と所在文の置き換えに関する一考察	鄧 超群 (121)
新聞社説における譲歩表現に関する分析—その談話機能を中心に—	単 艾婷 (131)
日本語の「内の関係」連体修飾節のモダリティについての考察	張 静苑 (142)
類型論的にみる日本語の目的語名詞の定性	魯 美玲 (153)
『萬葉集』にみられるオノマトペ—AB型を中心に(その式)—	王 則堯 (164)
<b>[中国語研究]</b>	
中国語の仮定複文における前後節の関係標識について	新田小雨子 (174)
時量詞構文における焦点について	福本陽介 (184)
歴史的に見た離合詞—“请客”“生气”“见面”	石井宏明 (195)
小説の地の文における“SV了O”文の成立条件	白石裕一 (205)
現代中国語の数量詞について	洪 安瀾 (218)
“把”構文における可能表現についての再考	小路口ゆみ (229)
位置移動の動詞“过”のスキーマについて	蘇 秋韵 (239)
二空間の質的対立から見た“过”の通過義について—「境界プロフィール」と 「場所プロフィール」に着目して—	佐々木俊雄 (250)
清末北京語動詞の実態—張廷彦『支那語動字用法』と『動字分類大全』に基づいて—	許 辰晨 (261)
2019年月例会発表記録	(272)
編集後記	(274)
執筆者一覧	(275)
英文目録	(276)

# 日本語の存在文と所在文の置き換えに関する一考察

## A Study on the Substitution between Existential Construction and Locative Construction in Japanese

鄧 超群  
DENG Chaoqun

**提要** 本文首先通过从 BCCWJ 语料库中采集的实例，对丹羽（2015a、2015b）所论及的存在句、所在句之间的对应关系进行了分析考察。在此基础上，重点分析考察了日语存在句、所在句之间能否互相替换的问题。当句中明示了存在物、存在场所，且「に」格名词、「が」格名词均为实体名词时，两者之间可以互相替换。但如果句中的「に」格名词（B）和「が」格名词（A）之间属于“ $B \in A$ ”（B 包含于 A）的包含关系、或“A 的 B”（B 是 A 的一个属性）的修饰关系时，则两者不能互相替换。

**キーワード**：存在文 所在文 置き換え 「に」格名詞

### 目次

1. はじめに
2. 先行研究と本稿の立場
3. 「存在文」と「所在文」の置き換え可能なタイプ
4. 「存在文」と「所在文」の置き換えが条件付きなタイプ
5. 「存在文」と「所在文」の置き換え不可能なタイプ
6. おわりに

#### 1. はじめに

言語類型論的な視点から見れば、多くの言語では、存在と所在という二つの関係を表すのに、あまり意味のないコピュラ動詞 (copular verb) が用いられるのが普通である。例えば英語の *Be*、ドイツ語の *Sein*、フィンランド語の *olla*、カンナダ語の *iru*、ヒンディー語の *hona*、エストニア語の *olema* などが挙げられる (Clark 1978:103-104)。これと同じような言語現象は日本語にも見られる。日本語でも、存在と所在を表すのに、コピュラ動詞ではないが、「ある」という一つの存在動詞<sup>1)</sup>がもっとも典型的に使用されている。

<sup>1)</sup> 日本語の場合は、有生物か無生物かによって、存在動詞「ある」と「いる」が交替して使用されて

(1) a. 机の上に本がある。(存在)

b. 本は机の上にある。(所在)

今までの多くの研究は、(1a) (1b) のような二つの「ある」文のことを、一概に「存在文」と呼ぶのが普通である(三上 1969、寺村 1982、森山 1988、白 2006 など)。それは「～に～がある」文型にしても、「～は～にある」文型にしても、どちらも〈モノの存在〉を表しており、動詞「ある」の語彙的な意味を考える上では、両者は同一の語義として統一的に扱うべきであると考えられよう。また、「所在文」を「存在文」の一部として扱った研究もある(西山 2003,2013、金水 2006 など)。しかし、構文レベルの意味を考える上では、異なる文型が用いられる以上、当然文の意味機能も違ってくるはずであろう。よって、この二つの文型を明確的に「存在文」と「所在文」に区分している研究もある(張 1990, 1992、丹羽 2015a, 2015b、曹 2016 など)。本稿は構文の視点から、(1a) を「存在文」、(1b) を「所在文」と称し、そして丹羽 (2015a, 2015b) の分類基準を検討しながら、日本国立国語研究所によって開発された『日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』よりの実例に合わせ、「存在文」と「所在文」の置き換えの可能性及びそれぞれの制約条件を考察する。

## 2. 先行研究と本稿の立場

### 2.1 丹羽 (2015a, 2015b) の研究

丹羽 (2015a, 2015b) は主に日本語の存在文と所在文の分類及び両者の相互関係を扱ったものである。その中で、特に所在文の分類については、先行研究(高橋・屋久 1984、西山 2003,2013、金水 2006)などで、(2a) のような空間的な所在しか扱わなかったという点が不十分であると指摘し、日本語の所在文の類型を下記 (2) で示す 8 種類に増やし、さらにそれぞれ存在文との対応関係を表 1 にまとめた。

(2) 所在文の分類 (丹羽 2015a)

- a. 場所型：時計は机の上にある。
- b. 時間型：戴冠式は八月一日にある。
- c. 周辺要素型：食糧はたくさんある。
- d. 抽象場所型：それは彼女の想像力の中にある。
- e. 上位型：遠足は春の行事としてある。
- f. 内容型：事故の原因は過積載にある。
- g. 状況型：生産は拡大の方向にある。
- h. 関係基体型：独自性はその文化にある。

---

いるが、本稿は存在動詞「ある」のみをあつかい、有生と無生の問題を検討しない。

表1 存在文と所在文の対応関係 (丹羽 2015b:267)

	存在文		所在文
場所型	BにはAがある		AはBにある
時間型	BにはAがある		AはBにある
周辺要素型	×		AはBある
無表示型	Aはある		×
抽象場所型	BにはAがある		AはBにある
上位型	B{には/としては}Aがある		AはBとしてある
内容型	×		BはAにある
状況型	×		BはAにある
関係基体型	BにはAがある		AはBにある

\* 実線で結んだものは焦点位置の入れ替え、点線で結んだものは二格とガ格の入れ替え。

\* 「Bに」の格は、「で」など他の格を含むこともある。

## 2.2 本稿の立場

上述 (2) の所在文の分類では、不適切なところがあると思われる。例えば、(2b) の時間型の所在文に使用される A (「戴冠式」) はふつうデキゴト名詞 (event noun)<sup>2)</sup> であり、ある出来事がある時間 (B) に行なわれる/発生するという意味を表すため、ほかの所在文とは意味的に大幅に異なるものである。また、(2h) の関係基体型の所在文においては、A (「独自性」) がふつう属性を表す名詞であり、「に」格名詞 (B) を補充、説明するという関係を表すものなので、これもその他の所在文とは意味上大きく異なっている。よって、本稿では (2b) のような時間型の所在文を「出来事文」、(2h) のような関係基体型の所在文を「属性文」として扱い、別稿に譲ることとする。

なお、丹羽 (2015a、2015b) は存在文と所在文の対応関係を表1に示したものの、互いになぜ対応できるか、或いは対応できないかの理由については触れていない。本稿は上記の理由に基づき、表1の対応関係を批判的に検討しながら、所在文を【I】置き換え可能なタイプ、【II】置き換えが条件付きなタイプと【III】置き換え不可能なタイプの3つのグループに分け、存在文との置き換えの可能性及びその制約条件を考察することとする。

ここで少し断っておきたいことがある。存在文の「周辺要素型」と所在文の「無表示型」は文中に存在場所の項が欠けており、置き換えの必須条件が備わっていないため、本稿の検討対象から除外される。なお、(2f) の内容型所在文について、丹羽 (2015a、2015b) では、

<sup>2)</sup> 本稿で扱う「デキゴト名詞」とは出来事や状態を表す名詞であり、「モノ名詞」とは物理的・抽象的な実体を持つと認識される物体を表す名詞である。具体的な定義と分類は、影山 (2011: 37-38) を参照されたい。

存在文に置き換えられないグループに入れられたが、コーパスより抽出された例文からみると、置き換えられる場合と置き換えられない場合の両方が存在するため、本稿は【II】置き換えが条件付きなタイプに入れて議論することにした。

### 3. 「存在文」と「所在文」の置き換え可能なタイプ

まず【I】の置き換え可能なタイプについてだが、その中に含まれている場所型と抽象場所型の2種類はともに空間関係を表しているものである。(2a)の場所型は具体的な空間・位置関係、(2d)の抽象場所型は抽象的な空間・位置関係を表しており、その二つは基本的に同じ場所型空間・位置関係を表示することになる。

場所型/抽象場所型の存在文と所在文において、存在場所と存在主体の二つの基本要素が備わっており、またこの二つの要素の間に、ある種の位置関係(具体的か抽象的か)がある場合は、互いに置き換えることができる。なお、このタイプの存在文と所在文は典型的なものとしてされており、文中にある「に」格名詞は具体的な場所を表すもの(3a、3b)か抽象的な場所を表すもの(3c、3d)であり、「が」格名詞も具体的なモノか抽象的な概念を表すモノ名詞であるほうが普通である。

(3) a. 書院造の建物は、柱は角柱で壁と天井があり、一棟の建物の中にいくつもの部屋がある。  
(『時代劇と風俗考証』)

→ 書院造の建物は、柱は角柱で壁と天井があり、いくつもの部屋は一棟の建物の中にある。

b. この段階でも冷蔵庫の中に、なお消費しきれなかった食品があったので、保冷が必要なものは階下の冷蔵庫へ移しました。  
(『Yahoo!ブログ』)

→ この段階でもなお消費しきれなかった食品は、冷蔵庫の中にあつたので、保冷が必要なものは階下の冷蔵庫へ移しました。

c. 仙道の考え方の中には『外丹』という概念がある。(『まじしやんず・あかでみい』)  
→ 『外丹』という概念は仙道の考え方の中にある。

d. 私たちの心の中には、自分では認めたくない部分があります。  
(『カウンセリングマインドの探究』)

→ 自分では認めたくない部分は、私たちの心の中にあります。

### 4. 「存在文」と「所在文」の置き換えが条件付きなタイプ

【II】の置き換えが条件付きなタイプ(即ち、置き換え可能な場合と置き換え不可能な場合があるタイプ)として挙げられるのは、(2e)の上位型と(2f)の内容型である。

まず、上位型というのは、「B{には/としては/の}Aがある」などの文型で表現され、BがAの上位概念・全体であり、AがBの下位要素、または部分集合である関係を持つものである。このタイプは寺村(1982)と金水(2006)では「部分集合文」、西山(2003)では「リ

スト存在文」と名づけられたものに当る。その中の動詞「ある」は、「挙げられる」という意味を表し、Bに対して例を挙げて説明したり、Bに属する範囲内のものを挙げたりするような存在である。次の(4)に挙げられたもの(「BとしてはAがある」)はいずれも「B(上位概念)にはA(下位概念)が含まれる」という文型で言い換えることができよう。(4a)の例を挙げてみると、「公益法人に関する税には、国税(法人税、所得税、消費税等)と地方税(住民税、事業税、地方消費税、不動産取得税等)が含まれている」という意味になる。このように、(4)の4つの例文ともに、「B{には/としては}Aがある」の文型を使う上位型存在文の場合は所在文に置き換えることができる。

(4) a. 公益法人に関する税としては、法人税、所得税、消費税等の国税、住民税、事業税、地方消費税、不動産取得税等の地方税がある。 (『公益法人白書』)

→ 法人税、所得税、消費税等の国税、住民税、事業税、地方消費税、不動産取得税等の地方税は、公益法人に関する税としてある。

b. 実用化されたプロセスとしては、電線被覆材の耐熱性、絶縁性等の向上、発泡ポリエチレンの加工、塗装塗膜の硬化等がある。 (『原子力白書』)

→ 電線被覆材の耐熱性、絶縁性等の向上、発泡ポリエチレンの加工、塗装塗膜の硬化等は、実用化されたプロセスとしてある。

c. 動詞には原形・過去形・過去分詞形の3つの語形変化がある。

(『国際コミュニケーションと国際関係』)

→ 原形・過去形・過去分詞形の3つの語形変化は、動詞にはある。

d. 導体にはカーボンや塩酸・硫酸・食塩などの水溶液(電解液という)などがあります。 (『イラストで学ぶでんき電気でんき』)

→ カーボンや塩酸・硫酸・食塩などの水溶液(電解液という)などは、導体にはあります。

しかし、(5)の例文が示しているように、Bのところの下位概念や集合の一部が指定される場合、即ち「Bの一つにAがある」のような上位型存在文の場合になると、その語順を逆にして「AはBの一つにある」という所在文に置き換えることができない。この場合は「AはBの一つである」のように、コピュラ文に置き換えなければならない。その理由として、格助詞「に」と連語「として」は上位概念に使われることができるのに対して、「一つ」はBの下位概念か、全体の一部かとはしか考えられないことが挙げられよう。

(5) a. 旅の楽しさのひとつに、この解放感がある。

(『モンダイは君のその喋り方と態度だ!』)

→ この解放感は、旅の楽しさのひとつである。

b. 日本人の普遍的価値観のひとつに「もののあわれ」があった。

(『日本人はなぜ「科学」ではなく「理科」を選んだのか』)

→ 「もののあわれ」は、日本人の普遍的価値観のひとつであった。

c. ふぐの名前の由来のひとつに朝鮮語起源説があります。 (『ふぐの文化』)

→ 朝鮮語起源説は、ふぐの名前の由来のひとつであります。

d. ハワイに長期滞在する目的のひとつに留学があります。

(『夢のハワイ暮らしが実現できる本』)

→ 留学は、ハワイに長期滞在する目的のひとつであります。

要するに、(5a) は「解放感=旅の楽しさの一つ」、(5b) は「もののあわれ」=日本人の普遍的価値観の一つ、(5c) は「朝鮮語起源説=ふぐの名前の由来のひとつ」、(5d) は「留学=ハワイに長期滞在する目的のひとつ」であるように、この場合の A と B はともに下位概念か部分集合として指定されているため、互いに同値関係 (A=B) の立場に立ち、コンピュータ文で表現されることになる。

このように、上位型存在文の場合は、存在文に置き換えるかどうかは条件付きであり、そのポイントは「ある」構文の補語 B の性質にあると考えられる。B は A の上位概念か全体を表し、格助詞「に」や連語「として」で提起する場合には、所在文に置き換えることができる。それに対して、B のところに下位概念や集合の一部が指定される場合は、所在文に置き換えることができない。このときは「A は B にある」という所在文より、「A は B である」というようなコンピュータ文に変換することができると考えられる。

次に、(2f) の内容型所在文について検討しよう。このタイプの所在文は主にことがらの原因、理由や問題の所在などを表すものである。以下で主格名詞が「原因」である例を挙げて説明する。

(6) a. なぜなら、自殺の原因は心の行き詰まりにあるからである。(『人生汗と涙と情』)

→ \*なぜなら、心の行き詰まりに自殺の原因があるからである。

→ なぜなら、心の行き詰まりは自殺の原因であるからである。

b. アメリカの繁栄の主たる原因は女性の優秀さにある。(『女性の理系能力を生かす』)

→ \*女性の優秀さにアメリカの繁栄の主たる原因がある。

→ 女性の優秀さはアメリカの繁栄の主たる原因である。

c. モスクワ事故の原因は日本航空にある。(『日本航空事故処理担当』)

→ 日本航空にモスクワ事故の原因がある。

→ \*日本航空はモスクワ事故の原因である。

d. 根本的な原因は別のところにある。(『仕事ができる人になる黄金情報』)

→ 別のところに根本的な原因がある。

→ \*別のところは根本的な原因である。

(6) の例文から分かるように、ともに原因の所在を表す 4 つの例文の中で、(6a) と (6b) は存在文に置き換えられないのに対して、(6c) と (6d) は存在文に置き換えることができる。



それはなぜであろうか。

まず、「に」格名詞の意味種類が肝心な要素の一つであると考えられる。(6c)と(6d)の「に」格名詞はともにモノ名詞であるが、(6a)の「に」格名詞はデキゴト名詞であり、(6b)の「に」格名詞は属性を表す名詞である。モノ名詞は具体的か抽象的な形を持つことが多いため、それ自身は存在物だけでなく、存在場所や所有者にもなりやすいのが特徴である。特に(6c)の「日本航空」は組織名詞であるため、原因の所有者であると解釈され、(6d)の「別のところ」は場所名詞であるため、原因の存在場所であるというふうに解釈されることになる。一方、デキゴト名詞や属性を表す名詞は存在物になる場合は考えられるが、存在場所や所有者として用いられることは基本的にありえないので、(6a)と(6b)は原因の所有者か存在場所に解釈されることができない。

それから、文の意味から考えると、(6a)と(6b)は「BにAがある」のような存在文に置き換えられないが、「AはBである」のようなコピュラ文に変換することができる。それはこの二つの文における「に」格名詞と「はが」格名詞は「A=B」という同値関係になると考えられるからである。一方、(6c)と(6d)はちょうど逆の状況になっており、「A=B」という同値関係にならないため、「AはBである」のようなコピュラ文に変換することができない。それに対して、「AにBがある」のような存在文に置き換えることができ、即ち、文中における「に」格名詞と「はが」格名詞は「 $B \in A$ 」、つまり「BはAに含まれる」という包摂関係になる。

また、次のような所在文も、「A=B」の同値関係であると解釈することができる。

(7) a. しかし日本における高齢化の特徴はまずそのスピードの速さにある。

(『日本経済の経済学』)

→ まずそのスピードの速さは、日本における高齢化の特徴である。

b. 加藤博士の分類が忘れ去られてしまったもうひとつの理由は、その分類の基準の複雑さにある。

(『DNAが語る稲作文明』)

→ その分類の基準の複雑さは、(…略)もうひとつの理由である。

c. 逆に偶然に出くわした見ず知らず人とコミュニケーションを形成することのむずかしさは、信頼関係の希薄さにある。

(『土壌汚染対策技術』)

→ (…略) コミュニケーションを形成することのむずかしさは、信頼関係の希薄さである。

d. 観光産業の最大の悩みは、この地元経済への波及度や貢献度の高い「土産費」の激減にあるのかもしれない。

(『検証「沖縄問題」』)

→ この地元経済への波及度や貢献度の高い「土産費」の激減は、観光産業の最大の悩みであるのかもしれない。

(7)の例文は「A=B」の同値関係を表す内容型所在文である。AとBは同値関係にある

ということは、その二つの位置を逆にしてもよいということになる。言い換えると、(7a)は「日本における高齢化の特徴=スピードの速さ」、(7b)は「もうひとつの理由=分類の基準の複雑さ」、(7c)は「信頼関係の希薄さ=コミュニケーションを形成することのむずかしさ」、(7d)は「観光産業の最大の悩み=地元経済への波及度や貢献度の高い「土産費」の激減」というふう置き換えても差し支えない。このタイプの所在文において、「に」格名詞はモノ名詞以外の名詞で担当されることが特徴である。「に」格名詞がモノ名詞でなければ、存在文に必要な場所表現が欠けているということになる。それはこのタイプの所在文は存在文に置き換えられない理由になると考えられよう。

## 5. 「存在文」と「所在文」の置き換え不可能なタイプ

【III】の置き換えが不可能なタイプとしては、(2g)の状況型が挙げられる。このタイプは、存在主体（「は」格名詞）と存在場所（「に」格名詞）の両方の要素が備わっているように見えるが、それでも置き換え不可能な状況になっている。それはなぜであろうか。以下でこのタイプに焦点を当て、詳しく考察することにする。

(2g)の状況型所在文は主にものごとの状況や発展の傾向などを表すものである。「に」格名詞の意味から考えれば、ものごとの状況・状態を表すもの「状況/局面/水準/状態」もあれば、ものごとの発展の方向性・趨勢を表すもの「傾向/方向/途上/運命/宿命」もある。

(8) a. 最近の我が国経済は、個人消費や設備投資が依然低迷しており、急激な円高や冷夏の影響も加わり、まことに厳しい状況にある。 (『国会会議録』)

b. ここに一例をみるように、先端技術は激しい開発競争の局面にある。 (『トヨタ成長のカギ』)

c. 我が国国内における外国人への情報提供の状況は、一定の水準にあることがうかがえる。 (『運輸白書』)

d. 新品タイヤの表面には、製造工程において型から抜き出しやすくするための剥離剤が皮膜として残っており、タイヤ本来のグリップ性能が発揮できない状態にある。 (『FENEK』)

(9) a. 次に、核家族世帯比率が全体としてまだ上昇傾向にあるものの、大都市では横ばいになり、そのかわりに、三世代世帯比率に上昇のきざしがみられることである。 (『国民生活白書』)

b. この制度はいわばまだ形成過程の途上にあり、まだ安定していない。 (『文明化の過程』)

c. 民話収集の礎たりえる仕事でありながら、クローカーの書物はテイラーのグリム翻訳の流れのなかで捉えられてしまう宿命にあった。 (『妖精のアイルランド』)

d. 近年の国際的な動向は、なお一層の規制強化の方向にあり、今日、我が国が対応

を迫られているものとして、次の2条約がある。 (『環境白書』)

(8) の例文はものごとが目下の状態や直面している状況を示し、(9) の例文はものごとの発展や変化の方向や趨勢を示している。両方とも A の一時的な状況・傾向を B で示すという意味関係を表し、言い換えれば、「に」格名詞で「はが」格名詞の状況を説明することになっている。この場合は、「は」格名詞は主題になっており、「に」格名詞はあくまで「は」格名詞を補足・説明する述題になる立場である。よって、この場合は「に」格名詞を「は」格名詞の前に持っていく、語順を逆にすることができず、状態を表す形容詞文か動詞文、コピュラ文に変換しなければならない。(8') (9') を参照されたい。

(8') a. 最近の我が国経済は、まことに状況が厳しい。

b. 先端技術は開発競争の局面が激しい。

c. 外国人への情報提供の状況は、一定の水準に達している。

d. タイヤ本来のグリップ性能は、発揮できない状態になっている。

(9') a. 核家族世帯比率は、全体としてまだ上昇している。

b. この制度は、まだ形成過程の途上である。

c. クローカーの書物は、テイラーのグリム翻訳の流れのなかで捉えられてしまう宿命であった。

d. 近年の国際的な動向は、なお一層の規制強化の方向である。

要するに、状況型所在文は主にもものごとの状況や発展の傾向などをあらわすものであり、「A は B にある」文型における「は」格名詞 (A) は文の主題になり、動詞「ある」は「に」格名詞 (B) との組み合わせで A を補足、説明する機能を持っている。このタイプの所在文における A と B の関係は「A の B」、つまり「B は A の属性の一部」という修飾関係になっている。この場合は普通、修飾と非修飾の格配列の順番が決まっており、それを逆にして、「B に A がある」というような存在文に置き換えることができないのである。

## 6. おわりに

本稿では、主に丹羽 (2015a, 2015b) で取り扱った存在文と所在文の対応関係を批判的に検討しながら、コーパスより抽出した実例に合わせて、存在文と所在文の間の置き換え可否のタイプと原因を考察した。本稿の内容をまとめると、次の結論を得ることができる。

- ① 置き換え可能なタイプは主に (2a) 場所型と (2d) 抽象場所型を指す。文中に存在物と存在場所の二つの要素が明記され、且つ「に」格名詞 (B) と「が」格名詞 (A) とともにモノ名詞が用いられた場合は、存在文と所在文の間で相互に置き換えることができる。
- ② 置き換えが条件付きなタイプは主に (2e) 上位型と (2f) 内容型を指す。上位型にしても内容型にしても、「に」格名詞 (B) の性質は置き換えの重要なポイントになると考えられる。上位型においては、「に」格名詞 (B) は「が」格名詞 (A) の上位概念か全体を

表し、格助詞「に」や連語「として」で提起する場合には、所在文に置き換えることができる。また、内容型においては、「に」格名詞 (B) がモノ名詞であり、且つ「に」格名詞と「が」格名詞の間に「 $B \in A$ 」、つまり「BはAに含まれる」という包摂関係になる場合は、所在文に置き換えることができる。

- ③ 置き換え不可能なタイプは主に (2g) 状況型を指す。状況型の場合は、文中の「に」格名詞 (B) と「が」格名詞 (A) は「 $B \in A$ 」、つまり「BはAに含まれる」という包摂関係か、「AのB」、つまり「BはAの属性の一部」という修飾関係になるため、置き換えることができないと考えられる。

### 参考文献

1. Clark, Eve V.(1978), Locational: Existential, Locative and Possessive Constructions. *Universals of human language*, ed. by Joseph H. Greenberg, Stanford: Stanford University Press:86-126.
2. 影山太郎 (2011) 「モノ名詞とデキゴト名詞」影山太郎編『日英対照 名詞の意味と構文』大修館書店: 36-60.
3. 金水敏 (2006) 『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房.
4. 曹大峰 (2016) 「日本語教育の進化に求められる日中対照研究—単純存在表現に関する初級文型の硬直化を防ぐために」『第八回中日対照言語学シンポジウム予稿集』:26-37.
5. 高橋太郎・屋久茂子 (1984) 「「～がある」の用法—(あわせて)「人がある」と「人がいる」の違い」『国立国語研究所報告書 79 研究報告集 5』:1-43.
6. 張麟声 (1990) 「中日単純存在表現の対照研究」『日本語学』9 卷 9 号:65-76.
7. 張麟声 (1992) 「中日所在表現の対照研究」『文化言語学: その提言と建設』三省堂: 890-873.
8. 寺村秀夫 (1982) 「存在の表現」『日本語のシンタクスと意味 (第1巻)』くろしお出版:155-161.
9. 西山佑司 (2003) 「名詞句の解釈と存在文の意味」『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房:393-424.
10. 西山佑司 (2013) 「存在文と名詞句の解釈」『名詞句の世界—その意味と解釈の神秘に迫る』ひつじ書房:243-328.
11. 丹羽哲也 (2015a) 「所在文の広がり—存在文との対応」『文学史研究』55 号:1-16.
12. 丹羽哲也 (2015b) 「存在文の分類をめぐって」『国語国文』第 84 卷第 4 号:260-281.
13. 白愛仙 (2006) 「現代日本語における動詞「ある」文の研究—「～がある」構文を中心に」大東文化大学博士論文.
14. 三上章 (1969) 「存在文の問題」『象は鼻が長い—日本文法入門』(改訂増補第 4 版) くろしお出版:246-232.
15. 森山卓郎 (1988) 「存在述語の構文」『日本語動詞述語文の研究』明治書院:266-27 明治書院:266-273.